

## 第二部 [中国大陸をたずねて] 〈洛陽・万里の長城編 4～5〉

### 4 万里の長城最先端、天下第一関を訪ねて

秦皇島、山海関、天下第一関の歴史に、について少し触れたいと思います。建てられたのは明の洪武帝の時代で、1382年に建造されたレンガ作りの城塞で、東西南北それぞれに城門が設けられています。

山海関の一番の見どころは、文字通り長城の最先端「老龍頭（ろうりゅうとう）」とも呼ばれ、渤海に突き出た部分が、龍の頭に似ていることからこの名がつけられました。



天下第一関のシンボルと言える城壁、マスコミにもよく登場します。潮が満ちてくると海中にその龍の頭の先端が沈み込んで、まるで海上に突き出たような姿に見えます。ちなみにこの「天下第一」というのは世界で一番という意味でなく、万里の長城の「東から数えて第一番目の関所」という意味です。

そもそもここはわれわれ日本人にはあまりピンときませんが、中国人にとって歴史上大変有名な地でもあります。明時代にあれほどかたくなに満洲族や異民族の侵入から守り続けてきた城壁でしたが、その堅牢な守備に固められてきた城門も明国末期になりますと、国が乱れ農民の反乱があちこちで起こります。しかし明の国防の主力はこの山海関を拠点に置いて、清に備えていたため反乱軍には対応できず、北京に反乱軍が攻め寄り占領されて

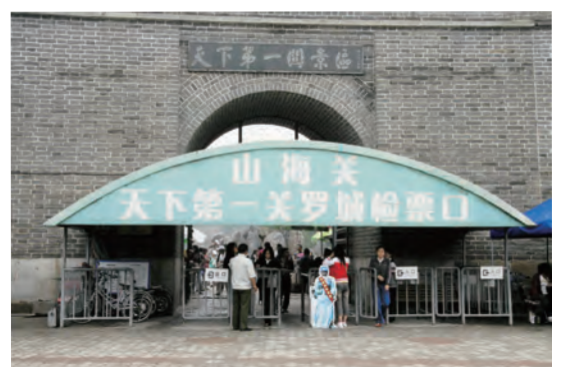


しま 中央部分が老龍頭と呼ばれる先端です。そして最後の皇帝毅宗（崇禎帝）は自殺、明国は滅亡に近づきます。

このとき山海関を守備していた明の部将、呉三桂は反乱軍につくか、あるいは異国民「清国」につくかの選択に迫られ、結局清に降りこの山海関の第一関を無血開城します。そしてこれら清

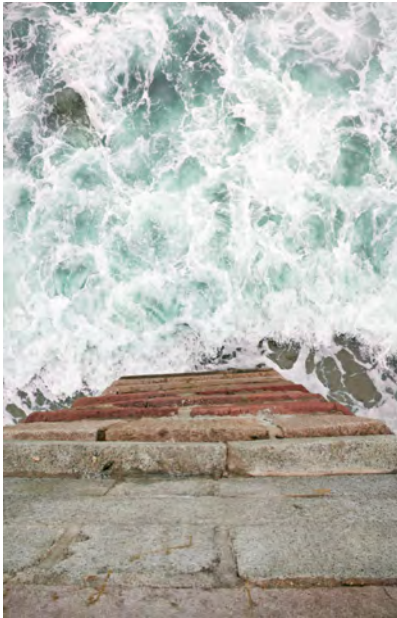


地元の人にとってここは人気スポットですが、清国との連合軍によって北京を奪還、結局反乱軍を率いた北京の李自成軍を攻撃、李自成は陝西の地に逃げ、乱は終結します。そして明の支配が終わり、満洲族率いる清国が新たに明に取って代わったという歴史的出来事の地がこの天下第一関のこの場所です。



ここもきっちり入場料を払わないと何も見られません

国が衰退の一步を続け滅び行きつつあるなか、反乱軍にこの国を明け渡すならば、自ら開門し、いっそ満洲民族に明



ここが長城の長さの起点0m部分です

け渡し、次世代を清国に託した方がましだという考えの基、万里の長城を自らの民族の手で、一番初に開門したのがこの山海関の天下第一関であったわけです。従って国の存亡を掛けた決断を行ったのがこの「山海関の戦い」となのです。中国にとって日本の「天下分け目、の天王山」に匹敵する大きな歴史上の出来事だったわけです。中国国民、なかでも漢民族や満州族にとっては非常に意義深い、歴史上重要な拠点でもあり、いわゆる国が明国から清国に替わった、無血開城の史跡となったという、何か江戸城の勝海舟らの元での無血開城、明け渡しに近いイメージを想像ください。



老龍頭先端の真下の海に突き出た部分の角部分

ちなみにこの山海関は軍事的要因の重要な関で、



この関を守ることは首都北京の攻防上最も重要とされ、山海関より西側を「関内」と称し、東側の満洲を「関東」

もしくは「関外」といいます。



老龍頭先端から眺める渤海湾の景色は絶景です

かつて日本の租借地であった関東州や、当時そこに駐留した、旧日本軍の最強部隊といわれた関東軍の名称もこれに由来のものです。

余談になりますが、おでんのことを関西で言う関東煮（だ）きと

いいますがこの関東とは関係ありません、広東煮（カントダキ）のなまったものです、中国広東料理発祥からこのなまえがつかわれたとの一説もあります。（別の説で江戸（関東）で食べられていた「煮込みおでん」も有り）全く関係のない話でした・・・笑い



従って案内中何度もここ山海関は中国国民にとって単なる観光地や、万里の長城の最先端ではなく、もっと重要な史跡でかつ、中国国民でないとその歴史、経緯がわからない歴史の重みを感じる、万里の長城最先端であるとの解説をガイドから説明を聞きました。



城壁の中は展示室や資料室になっています、これは牢屋のようです





城壁を守る兵器のようです、当然  
展示用の復元模型だと思います

さて、話  
はここまで  
は前置きで  
す。訪れた  
当時として  
は経済発展

中の中国とは  
いえ、なか

か国内旅行もままならない時代、中国人



この頃丁度北京郊外に開園した動物園の  
展示用のシマウマが入手困難で馬に白ペ  
ンキで塗って檻に入れられていたとニュ  
ースで報じられ、世界からブーイングを  
浴びていましたが、石で出来た展示用の  
馬があまりにお粗末で貧弱です。



城壁の内側のパノラマ風景、当時の貴重な家並み保存、再現した家屋が展示されていました



にとっては大事な観光ス  
ポットですが日本人はじ  
め外国観光客は減多に訪  
れることのない、地元の  
みを知る人ぞ知るの観光  
地であったようです。

当時は中国人が日本へ



これは結構式に向かう花嫁のかご、もちろ  
ん、観光客向けデモンストレーションです



この日は少々海が荒れ模様でしたが、それでも渤  
海湾城壁左前方に見える観光スポットは絶景です

そうですが、海外旅行と称して国外脱出を兼ねて、  
帰ってこないケースを想定して、中国国内に相当  
な資産を有する階級しか海外旅行を認めていなかった時代です。観光ガイドですら、日本語は話  
せるが日本には行ったこともない、彼らにとって訪れてみたい国として羨望の的としてとらえて  
いました。ちなみに当時大卒の給与で3~5万（日本円）レストランのウエイトレスで5000円  
ぐらいと記憶しています。その頃の1500万円の保証金を出せるのは相当な金持ちクラスだった  
と思います。

旅行するには日  
本円でおおよ  
1500万円  
ぐらいの保  
証金を積ま  
ないと行け  
ない、保証  
金は帰国す  
ると返し  
てくれる



先端の起点左部分、ここから総延長21,296.18kmあります

ただ、この1500万円の保証金額はガイドから聞いた数字で確認したわけではありません。



城壁の上はこんな風に散策できる広さようです、観光客相手に土産物屋や屋台の parasol も出ています

この天下第一関の老龍頭等の史跡は世界遺産にも登録されて間がない頃、ご存じの方もおられるかと思いますが、世界遺産の登録条件には水洗トイレ設置で清潔さが第一の必修条件だそうで、トイレが完備してない史跡は登録から除外されるらしく、遺跡内は完備していましたが一步外へ



本日お勧めですが、食材の管理がだめです氷も敷いてありません。おいしそうにできあがった料理の中に牡蠣が腐敗出るとこれが大変なんです。

何せ地元民しか行かない観光地域ということでトイレ問題には、はたはた困り果ててしまいました。現在ならこの天下第一関という世界遺産登録も知れ渡り、外人も多く訪れる観光地に変わってきていますので、トイレは解消されているとは思いますが、当時は地元民対応の観光地です、外人観光客に向けてトイレが完備していない、地域観光客密着型なのです。

お昼ご飯はどうしますとガイドから聞かれて、海のそばですので、海鮮料理がいいと希望しますと、早速連れて行ってくれた高級レストランでしたが、入るなり生の魚介類が入り口に「本日のお薦め」これを注文してください、といわんばかりのように実物食材がサンプル的に並べています。いかにも新鮮でおいしそうなのですがところがどっこい、日本の食材なら鮮度を保つため下に氷を敷いて店先に見本として飾りますが、この国はそういう生鮮魚介類の取り扱う習慣がありません。



常温で皿に入れたまま、入り口に並べてあります。訪れたのは6月ごろでしたので、気温も高い中、これはちょっとやばいんじゃないと思



中国では普通の市場の生鮮魚の販売方法（桂林にて） つつも、ガイド 海鮮料理店は生けすから選んで調理してもらいます

が通訳して注文取りをしてくれると店側も本日の展示の品を真っ先に薦めてくれます。結局調理して運ばれてきた料理一品の牡蠣料理に腐敗品が混じり込んで、食べるなり全員はき出す始末、「こら、あかんわ！」もう店にクレームを言う元気も出ません。やはり生で食する文化をもたない中国ではたとえ海辺の海鮮料理店であっても鮮度の管理まで日本のレベルに達するのにはそれ相当の時間が必要と改めて知った経験になりました。そういえば当時中国で冷凍車や冷蔵車など走っていませんでした。今なら寿司も食しますし、海鮮料理を生で食べるといった習慣も身につけていると思いますし、管理方法も変わってきていると思いますが、当時は観光の合間に地元の市場なども探索しましたが、どこの店へ行っても食材の下に氷を敷く販売法等は見ただことありませんでした。

鮮度のいい保存と言えは生きたまま販売する、というのがこの国の調理法なのです。ほとんどの店が魚は淡水魚でしたが、ぶくぶくを入れて、大型の水槽かおおきな洗面器みたいなもので、生きたものを販売していました。中には死んでいてもあまり気にせず販売していたのがこの国の鮮魚の扱い感覚です。中華の高級海鮮料理屋などでは、水槽やいけすに入れて客が指定しますと、すくい上げてその場にて調理する方法、これに勝る生鮮料理はないようです。それに内陸部になると新鮮な海の魚を生で食べるなどという食習慣などは全く見たことありませんでした。西安のレストランでもコース料理で、ウナギが出るというので、期待をしていたら女性の腕ぐらいの太い目の、泥抜きもしないウナギをぶつ切りにして油炒めで出てくる始末、今なら日本人に習ったんでしょうか、最近のYouTube など見ると蒲焼きマスターして、いつの間にか中国本場の蒲焼きは日本のウナギよりうまい、うまいなどといって食べているみたいですが・・・



前述の地元の高級レストランの来客専用トイレ（男）です、もちろん紙は流せません、上のポリバケツにいれます、反対側は小便器があります

かつてはウナギの蒲焼きの調理方法すら知らなかったのが事実です。また昨今は世界中の寿司のブームで世界中の生魚の取り扱いも随分変わったみたいです。

さてこの日のツアーは帰りの高速鉄道のチケットが取れません。行きは北京発で中間の秦皇島迄でしたのでチケットは取れたのですが、帰りは北京―天津利用客の多い路線、当時はまだ走り始めたばかりの中国初めての高速鉄道で、特にここは人気路線のため、秦皇島など中間から乗り、北京に向かう切符が取れない、これはツアーを組んでもらう時点でわかっていたのですが、帰りは高速道路経由の路線バスになりました。ここでまた大きな問題発生です。

つれのひとりがバスの待合室ターミナルで用を足しに行った時の話です。「とてもよーせんわ！」といって中断してあきらめて帰ってきたいきさつがあります。聞くとかなり酷いというか中国おなじみの地元密着型「ニーハオトイレ」よりもっと酷いものだったらしいです。一応水洗らしかったですが、流れてもいなく、汚物がてんこ盛りに盛り上がり、ニーハオどころかさすがに叫び声すらでませんでした。あきらめて北京まで我慢すると言って帰ってきました。また、屋に入った高級レストランの来客専用のトイレも写真の有様です。隅にあるバケツは使用済みペーパー入れ、もちろん使用したペーパーは中国では流すことはタブーです。こればかりは男子用でしたが思わずシャッターを切ってしまいました。



帰りのバスターミナルの問題のトイレ（洗手间シーショージェンといいます）

## 5 万里の長城八達嶺



晴れた日の北京市郊外に連なる万里の長城八達嶺、天下の絶景です（絵になる写真は翌年訪問時の写真です）

改めて解説することはありませんが、我々が学校で習った時代の頃から、最近になって分かってきたこともありますので、ついでに知っていただければと思います。八達嶺は北京から車で1



山並みに沿って延々と連なる万里の長城八達嶺、絵になっています

時間半程度、会員の方も訪れた方もおられるかと思えます。世界遺産にも登録され、観光写真などでも有名な被写体として、あまりにも有名です。またこの部分が最も手入れが行き届き、きめ細かく修復されて保存されている名所です。観光には入口で入場料もしっかり取られ、山頂にある長城へは歩いても上がれますが、ロープウエーまで備わって、高齢者にも訪れやすい観光名所になっております。敷地内はパビリオンようになっており北京を訪れた多くの観光客がここを訪れる万里長城代表スポットです。

ところで万里の長城といえば秦の始皇帝

時代から作られ初め、最終的に今の現存している部分はほとんどが明の時代に完成したものです。しかも最も頑丈にその外壁はレンガ作りとなっていて、しっかりした作りのため何百年間の風雪に耐えることができ、今日に姿をとどめています。

現地でガイドに構造的について聞いてみますと、専門用語で「版築」(ばんちく)と呼ばれる工法で、レンガなどで補強の壁をこしらえて、中は土を突き固めて壇を作る工法。長城もこの工法で、全部レンガ作りではなく、壁の外側何列かと上部はレンガを積んでモルタルで固めてあり、中身全体は土を突き固めて張り子の虎構造になっているとのこと。もちろん全部がこの構造ではありません、いろいろ調べてみるとレンガの元となる陶土やそれを焼く石炭の入手困難な中国シルクロードの続く奥地西域になると、日干しレンガや砂土石の混じった礫を突き固めた痕跡が続いているそうです。



枝部分の端はこのようになっています、TVカメラが邪魔です

そしてその長さは西の端は甘粛省の「嘉峪関」、東の端は河北省の「山海関」少し前までは



6,352kmに及ぶとされていましたが、その後調査がどんどん進むにつれて、新時代シルクロードの端に続く日干しレンガの長城の痕跡や、支線ともいえる枝分かれした部分が発見され続けそれも含めると、2012年6月に中国の国家文物局によって総延長21,196.18kmに及ぶとの発表がありました。何しろ広大な土地を抱えている国です、国が豊かに成り学術調査にゆとりが生まれてきますと、どんどん奥地や西域の果てまで調査が進みます。埋もれた痕跡まで調べ出すとどんどんその長さが増えていくようで

長城のどこに居ても人、人、人ラッシュの八達嶺です。初期のころ発表されてきた明代の完全に形の残さ

れていた部分だけでなく、始皇帝から始まって歴代の王朝から面々と引き継いで作られてきた、全ての長城の長さを合わせますと、おおよそ地球半周以上になるという驚異的なものです。

万里の長城といえばスペースシャトルから見える人工物の一つで、もう一つはおなじみエジプトのピラミッドということらしいですが、このことは中国の教科書に長い間掲載されてきたらしいですが、2003年に中国初の有人宇宙船に搭乗した宇宙飛行士の報告では万里の長城は見えなかったと証言したため、このことは教科書から削除されたそうです。中でも万里長城、八達嶺といえば中国でも超有名な観光地で、万里長城の観光ガイドには必ずといっていいほどこの風景が紹介されています。



どこを撮っても絵になる光景です、この人の多さ

最終日は今回のツアーで一番の見所で、最後に期待していた観光先である万里の長城八達嶺になりますがあいにくの雨天に近い曇天です。最後の名所も天候に恵まれず霧雨のなか観光、せつかくの名所が霧とガスがかかってなにも見えません、

見え

ないあたりが八達嶺・・・洒落にもなりません。周りが全く見えない中での万里の長城見学となりました。それでも地元観光客も含めていっぱいの人です。天気良ければどうなることを心の中で想像しながら、結局残念ながら翌年にもう一度リベンジしようとの決意を固め、あきらめでの帰国の途となりました。

そのため掲載している万里の長城、八達嶺の写真は、翌年のリベンジ写真がほとんどです。今回の悪天候写真も最後に少し掲載しておきますが、何も見えない、見えないあたりが八達嶺の写真です。リベンジで翌年訪れた天下の名勝八達嶺はさすがに立派でした、すごいです。確か65歳以上高齢者向け半額引きで入場できました・・・なぜかという年齢を重ねると体力的に長城の半分ぐらいしか登り切れない人が多いためとの配慮だそうです。このとき若干名だけ65歳を超えていましたが、仲間5人全員が急遽65歳以上に変わり、身分証のパスポート見せろとも言われましたがホテルに置いてあるなどと返答、臨機応変でこのとき二人だけ65歳を超えていた全員半額で全員長城最終地点まで登り切ってきました。



あいにくの天候にもかかわらず、さすがにこの人気です、何も見えません、翌年もう一度訪れようと決意を決めた写真です

現地には「**長城に到らざれば好漢に非ず**」という毛沢東の言葉が記念碑として残されているそうです。万里の長城に行かないのは、一人前の立派な男でない、何か大きなことを成しとげる決意を表明する、ことわざにも使われているらしいのですが、まあ北京に来てこの八達嶺に上らないのはもったいないという解釈もあるらしいのですが、中国人にとってこの万里の長城に一生に一度は上っておかねばならないのがこの八達嶺だそうです。それぐらい景色の美しくどこを撮ってみても画（絵になる）と言っても過言ではないでしょう。

それと終にもう1点、次の機会にエジプト編でも書いてみたいと思っていますが、エジプトのピラミッドの構造ですが、最近になってこのピラミッドをわずか19年で造ったことが判明しています。証拠となる作業日記が発掘されたのです。石の数は西洋人が試算すると230万個（規則的に積んであるとしてです）、もし作るとなるとこの230万個を19年で割り、さらに川の氾濫なども考え年間300日稼働、暑い国なので朝夕しか重労働ができません、8時間働いたとして割っていきますと、最終的に1時間に50個ぐらい積んでいかないと、とても19年ではできません。しかも上に行くほど作業エリアが混み合います。このように簡単、単純計算では行かないと思います。そうすると結論的にはやはり中心部は砂や瓦礫がはいっているとしか考えられないのです。つまり建造年数から逆算しても230万個も全部基礎から俵積みのように、きっちり石材を積むととても19年で作れるとは思いません。万里の長城と同じ張り子の虎構造なら19年でできるのではないのでしょうか。



万里の長城の構造がよく分かるイラストがネットにありましたのでお借りしてきました、造ったのは多くの農民、兵士足かせをつけているのは、謀反を起こした犯罪人などが労役にあたりました、多くの犠牲の元で造られたと思います

とにかく現地エジプトに行ってみれば分かるのですが、こちらのピラミッドも万里の長城の建築構造からも鑑みて、全部石を一段から規則正しく積んであるのではなく、壁側3~4列のみ切り出し石材で積んで、真ん中部分は瓦礫や砂でできているのではないかと、思うのは私一人では無いと思います。

最後になりましたが、この中国旅行は何度かに分けて訪れた中国の旅行記でも、結構実り多い思い出深き旅となってしまう、是非知っていただこうと今回の紀行に前半に万里の長城を採り上げさせていただき、後半は中国大陸奥地を訪ねて、中国奥地シルクロード西域へ続きます。